

就学前段階からの総合的な相談支援を行う療育センターのあり方

～子どもの幸せにつながるよりよい就学支援をめざして～

川崎 徳子^{*1}・立川亜紀子^{*2}・板持 春那^{*2}・奥住 麻子^{*2}・丸山 祐奈^{*2}

Current Situation of Health and Education Centers Providing Comprehensive Preschool Advisory Support :
Improved Preschool Support will Make for Happier Children

KAWASAKI Tokuko^{*1}, TACHIKAWA Akiko^{*2}, ITAMOCHI Haruna^{*2}, OKUZUMI Asako^{*2}, MARUYAMA Yuna^{*2}

(Received August 6, 2021)

キーワード：特別支援教育、幼児期の子ども、発達支援、療育センター

はじめに

昨今のめまぐるしく変化する環境や社会状況の中で、子ども一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う「特別支援教育」が、平成18年の教育基本法の改正とともに進められてきている。また、平成24年には、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が示されるなど、「共生社会」「インクルーシブ教育システム」の理念が教育の現場でも意識されるようになってきている。さらに「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議」のもとで、特別な配慮を要する子どもたちがその可能性を最大限に伸ばしていくこと、自立と社会参加に必要な力を培っていくための適切な指導や必要な支援を保障していくための方策等の検討がなされてきた。^{1) 2)}そして、令和3年6月「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」(平成25年10月に作成された「教育支援資料」からの改訂)が作成されたところである。³⁾ここでは「教育的ニーズ」と言う言葉とともに、子ども一人一人の育ちを支える的確な支援や連続性のある多様な学びの場の充実・整備の重要性が説かれ、早期からの「一貫した教育支援」を目指すこと等があらためて示されている。

これまで、学部・附属共同プロジェクトのもとで、附属特別支援学校にある療育センターの設置を目指し、附属特別支援学校の発達支援部と学部教員が連携しながら、環境要因や発達障害等により様々な面で困り感をかかえている幼児期の子どもより良い発達を支える支援と、就学前段階から就学、あるいは就学後における支援がつながっていくための活動を進めるとともに、その実践の検討を積み重ねている。これらの検討より、附属特別支援学校に設置する幼児期の子どもからの療育センターが行う活動は、①幼児期の子どもの発達支援とその保護者への療育相談、②附属幼稚園における5歳児発達相談会の取り組み、③校内、園内の支援体制の構築等の3つの方向でその役割の整理が進んできている。

2018年度のプロジェクトでは、これまでの活動を整理し、広く就学前の子どもたちが関係する教育機関等での支援活動にもつながるように実践をマニュアル化することにも取り組んだ(立川・井上・小野・大塚・板持・川崎 2019)⁴⁾。また、2019年度には、本プロジェクトの中心的活動の一つである『ヤマミィの一む(幼児発達支援教室)』の教育実践について、『ヤマミィの一む』の活動が特別支援教育を専門とする教員が担当し、附属特別支援学校に設置するからこそ整えられる環境がもつ質的教育的内実について、心理的教育的視点から考察し、物理的要因、人的要因、空間的心理的の3つの視点から描き出される特性と独自性を明らかにするとともに、『ヤマミィの一む』がもつ子どもの療育的支援の有効性を示した。さらには、活動と並行して学部教員とともに外部からの研究者も加わって実践に参加しながら調査研究を行い、現象学的視点を踏まえた考察から保護者支援の場に立ち起こるピア・コミュニティの役割や可能性を捉えている。(川

*1 山口大学教育学部幼児教育コース *2 山口大学教育学部附属特別支援学校

崎・立川・中川・板持・村田・丸山・大塚 2020)⁵⁾。また、これらの成果の中からは、『ヤマミィる一む』の活動が、公的な療育サービスの届きにくい子どもたちの発達支援の活動の場として機能してきていることなども見えてきている。

こうした幼児期の子どもの療育的支援と保護者のサポートを就学前の支援から、就学後までを支える療育センターの役割を体系化していくためには、マニュアルに基づいた実践からの系統的な検証を重ねていくことが望まれる。しかしながら、2020年度のプロジェクトでは、新型コロナウイルス感染症の拡大により、社会的に示された様々な行動制限を含む感染症対策とともに、山口大学、及び、教育学部附属特別支援学校の新型コロナウイルス感染症対策を踏まえての療育センターとしての活動のあり方を模索することとなった。

そこで、本稿では、2020年度の活動として、新型コロナウイルス感染症対策下で実施した療育センターの活動をまとめ、その活動の中でも特に『ヤマミィる一む』について、子どもの活動支援にしばった形で試行錯誤しながら継続した活動内容を整理し、この実践の省察から今後の活動への方向性を考えていく。

1. 目的と方法

1-1 目的

2020年度は、年度当初より、山口大学、及び教育学部附属特別支援学校の新型コロナウイルス感染症対策の下での本プロジェクトとして進行可能な活動と、感染症対策の中での活動の継続的なあり方を検討した。

本稿では、新型コロナウイルス感染症対策のもとで状況に応じて、活動をマニュアルに従って再構成しながら実践と検討を行った2020年度の活動を振り返り整理し、マニュアルの検証を進めていく。

特に、附属特別支援学校が活動場所となる幼児期の子どもの発達支援とその保護者の療育相談について、山口大学、及び、教育学部附属特別支援学校の「新型コロナ感染症対応計画」に準じて活動を行うために厳選して進めていった実践とその成果を省察し、療育的支援の妥当性や今後の活動につないでいくための『ヤマミィる一む』の意義や方向性を明らかにしていくことを目的とする。

1-2 方法

作成している療育センターの活動マニュアルの内容を踏まえ、山口大学、及び教育学部附属特別支援学校の新型コロナウイルス感染症対策「新型コロナ感染症対応計画」に準じて行った活動について、その実践を振り返り整理することから、成果と課題を明らかにする。

○5歳児発達相談から小学校への移行支援の実際を整理する。

○『ヤマミィる一む』については、【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】の実際と、子どもの療育的支援を進めるにあたり、保護者の来所の目的から子どもの実態と支援を検討していった実践を整理し、『ヤマミィる一む』の療育的活動を通しての子どもの育ちの可能性と支援の方向性を考察する。

○活動後の保護者アンケートから、『ヤマミィる一む』の意義やその役割を探り、今後の保護者支援を見通していく。

2. 2020年度の療育センターの取り組みの概要と実際

療育センターの2020年度の主な活動とその実際を整理すると、以下の4つである。

①ヤマミィる一む

年度当初より、山口大学、及び教育学部附属特別支援学校の新型コロナウイルス感染症対策「新型コロナ感染症対応計画」に準じて活動を検討し、【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】を作成した。実際の『ヤマミィる一む』は7月から開所し、子どもの療育活動を主とした形での活動実践をマニュアルの検証とともに進めていった。

活動回数は、7月より全11回。入所した子どもは、年長児3名、年少・年中児5名の2グループ、計8名。個別エリアを設け密をさけての活動を行う。子どもの活動は、生活年齢別の小集団を設定し、その上で刺激の少ない環境づくりを工夫して行った。感染症対策では、参加幼児の毎日の検温と記録表の提出。当日の検温、健康観察、アルコール消毒の徹底など、附属特別支援学校の感染症防止に向けた対応方針にしたがって活動を厳選して進めた。また、保護者同士の交流も含めたペアレント・トレーニングは中止とした。

それに変わる保護者の活動として、個別の保護者相談を行った。

尚、『ヤマミィる一む』の活動の詳細については、後述する3.活動の成果と考察の中で取り上げていく。

②5歳児発達相談

年度当初行っていたスクリーニングも感染症対策のもとで、状況に応じながら時期をずらして行った。また、これまで附属幼稚園における発達支援活動として発達支援部が連携しながら進めてきたが、附属幼稚園を中心とした体制づくりと5歳児発達相談会として実施していけるように、昨年度作成したマニュアルに基づいて園内で進める方向での活動へと移行を進めている。

③附属幼稚園から附属小学校への移行支援

附属幼稚園、附属山口小学校、附属特別支援学校の三者での情報交換を実施し、支援の必要な幼児の支援計画を引き継ぐことなどは、例年通りに実施することができた。

④支援体制のマニュアル化

療育センターの役割として行っている活動のマニュアル化については、『スクリーニング』『通級支援』『5歳児発達相談会』『ヤマミィる一む』それぞれの形は整えられてきた。加えて、今年度は、『新型コロナウイルス感染症予防に関する資料』を追加している。

3. 活動の成果と考察

3-1 2020年度【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】に基づいた『ヤマミィる一む』の実施内容

『ヤマミィる一む』に入所する子どもと保護者の中には、年少児より就学まで継続して通ってくるケースも多く、2020年度も継続の希望が出されていた。また、『ヤマミィる一む』に求められていることには、必要な支援を受けるための公的な療育サービスには届かない子どもたちが療育的な活動を体験できることや、活動を通してこれからの支援の方向性を探っていきながら適切な環境へと繋いでいくことなど、保護者支援を行いながら進めていけること、そして、それらを保護者自身も相談できるなど、子どもと保護者のニーズに包括的に対応していけるシステムが整えられてきていることにある。

さらに、2020年度の新型コロナウイルス感染症対策によって、日常生活の多くがこれまでと違った形で進んでいる中、家庭で過ごす生活が続くことによって、支援が望まれる子どもたちの影響も多いことも考えられる。こうした状況と希望者のニーズを考慮しながら『ヤマミィる一む』の担当スタッフとしても、感染状況を見つめつつ、開所に向けての準備と感染症対策下での活動の在り方を検討し、【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】に基づいての活動へと至ったのである。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、以下のように変更を行った。（山口大学附属特別支援学校 ヤマミィる一むマニュアル2020）

【期間】 5月下旬 ～ 翌年2月中旬 →修正：7月29日 ～ 翌年2月24日

【場所】 山口大学教育学部附属特別支援学校 →修正：芙蓉館（校内宿泊訓練施設）

【時間】 毎週水曜日 年長対象の活動13時30分～14時30分

年少～年長対象14時30分～16時30分引き続きの活動の年少～年長対象の全員での集団活動

14時30分～16時30分は中止。 →修正：年少、年中対象 15時00分～16時00分

*年長児のグループと年少・年中児のグループの2グループで、時間帯をずらして行った。

【参加幼児】 年少・年中児～5名 年長児～3名 計8名

【スタッフ】 附属特別学校教職員（発達支援部） 4名

【参加条件】 以下の項目について承諾を得られた場合のみ参加を可能とした。

1. 活動実施日の2週間前から、毎朝の検温及び風邪症状等の確認した内容を「健康観察表」に記入する。
2. 活動参加にあたって、「健康観察表」に当日の体温と体調について記入し、提出する。
3. 活動参加日以外も、毎朝検温を行い、「健康観察表」に記入し、提出する。
4. 山口大学教育学部附属特別支援学校の新型コロナ感染症対策に従う。
5. 保護者は送迎時マスクを着用し、手洗い等の衛生管理や咳エチケットを励行する。
6. 活動期間中に、「本人、または家族が、新型コロナウイルスの感染症等が疑われる場合、本人ないし同居する家族が、濃厚接触者と認められた場合、『ヤマミィる一む』の活動を中止する。

【年間計画】 表1の通り、マニュアルでは、4月の開所から2月末までの計21回の年間計画を示しているが、2020年度は、【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】に基づき、活動を厳選して計11回を計画し、実際には10回の開所であった。

【その他】

- 感染症対策を講じてもお感染の可能性が高い以下の活動については行わない。
 - ・既製品の菓子を含む一切の飲食を伴う活動
 - ・幼児が密集する運動や幼児が近距離で組み合ったり接触したりする活動
 - ・幼児が密集するグループ活動
 - ・プールを含む水遊び活動
 - ・小学校体験を目的とした給食活動
- 保健衛生に関する感染症対策として、用具の消毒と使用量の制限、手洗いの励行、トイレの消毒、室内の換気、健康観察を行うこととする。
- 参加幼児の保護者対象に行われているペアレント・トレーニング、茶話会、ミニ講演会、療育の参観は当面の間、中止する。
- 以上のことを含む感染症対策は原則として学校施設の対策に準ずることとする。

表1【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】に基づいた令和2年度『ヤマミィる一む』年間計画

日時(水曜日)	年長グループの主な活動	年少・年中グループの主な活動
1 7月29日	・ヤマミィる一む開所式 ・学校探索	・ヤマミィる一む開所式 ・学校探索
2 9月2日	・個別の学習 ・みんなであそぼう	・みんなであそぼう
3 9月16日	・個別の学習 ・運動	・運動
4 10月7日	・個別の学習 ・工作	・工作
5 10月21日	・個別の学習 ・みんなであそぼう	・みんなであそぼう
6 11月25日	・個別の学習 ・工作	・工作
7 12月16日	・個別の学習 ・クリスマス会?	・クリスマス会?
8 1月13日	・個別の学習 ・運動	・運動
9 1月27日	・個別の学習 ・みんなであそぼう	・みんなであそぼう
10 2月3日	・個別の学習 ・工作	・工作
11 2月24日	・ヤマミィる一む開所式 ・みんなであそぼう	・ヤマミィる一む開所式 ・みんなであそぼう

3-2 令和3年度 新型コロナウイルス感染症対策下での『ヤマミィる一む』の活動の実際

2020年度は、7月からの活動のスタートとなり、開所の回数もこれまでの半分になったことや、新型コロナウイルス感染症対策下での活動のため制限されることも多くもあって、活動の内容も方法にも様々な工夫が求められた。しかしながら、限られた時間や環境での子どもと担当スタッフとの関わりは、丁寧に一人一人の子どもの教育的ニーズを捉えられる機会としても生かされることになったのである。

前述したように『ヤマミィる一む』に来所してくる子どもたちは、日常生活の中で、子ども自身、そして、保護者が、何らかの困り感を抱いていたり、所属している幼稚園や保育所等の幼児教育施設での生活において、保育者等から「気になる子ども」と感じられているような状況を抱えていたりする。子どもや保護者の困り感や「気になる子ども」という表現がなされる子どもの状況は、発達障害等の医学的診断を受けている受けていないに関わらず、子ども自身、あるいは、その保護者が環境の中で伸びやかに過ごせていない状況をもたらす。ところが、その状況の具体的な実情については、子ども一人一人の特性や発達の様相、時には、その時の気分や環境の違い、向き合う人との関係性等による影響など、特定して捉えきれないとも言える。こうした子どもの状況については、これまでも保育者の困り感から特別な支援が必要な子どもの保育についてなど、幼児期の教育の現場での子どもや保育者、保護者への支援の検討や「気になる子ども」の行動のアセスメントの方法から対応の工夫等についての研究からも捉えられる。^{6) 7) 8)}

これらにも示されるように、求められている早期からの一貫した教育支援の在り方と幼児期の子どもの発達の特性や可能性から見る子どもの捉え方には、難しさあることが伺える。この点については、平成24年度に示された文部科学省の調査(2012)「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」にも見られるように、小中学校における知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面に著しい困難を示す児童生徒の割合が6.5%、その実情は、学習面での困難、「不注意」又は「多動性—衝動性」の問題や「対人関係やこだわり等」の問題として捉えられており⁹⁾、就学前の子どもへの支援の在り方や子どもの保護者への対応が保育者等に求められることにもなっている。^{10) 11) 12) 13)}

3-3 活動の振り返りから子どもの特性に合わせた支援の工夫を整理する

令和3年6月の「障害のある子供の教育支援の手引き～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」には、就学に関する事前の相談・支援として行われる様々な活動として、対象となる子

どもの行動等の観察の必要性が示されている。そこには、「①子供との直接的な関わりを大切にする②子供の可能性を探る視点をもつ③複数の視点から観察する④事前の情報収集を大切にする」¹⁴⁾ という項目での留意事項があり、いずれも『ヤマミィる一む』の活動と担当スタッフが目指している子ども一人一人への丁寧な関わりと子どもを捉える視点と重なるものである。

ここでは、2020年度の活動の状況や担当スタッフの記録している一人一人の子どもとのかかわりの様子等と保護者が求める『ヤマミィる一む』への期待（ニーズ）をもとに、個別の子どもの特性に合わせた支援の工夫等を整理する。

まず、保護者のニーズを捉えると、次の5つにまとめられた。

- ・言葉が少ない
- ・幼稚園や保育園でのトラブル（手や足が出る）
- ・集団参加が難しい
- ・初めての場所や活動が苦手である
- ・手先が不器用である

そこで、保護者が捉えているこれらの悩みに対して、該当する子どもへ担当スタッフが個別にアセスメントを行い、個々の子どもに合わせた遊びを中心にした毎回の活動やかかわり方を検討した。そして、毎回の振り返りから次の活動の計画へという個別の支援計画の作成につながる計画（Plan）—実践（Do）—評価（Check）—改善（Action）のサイクルを繰り返しながら、子どもの状況に対応する支援をつないでいく取り組みを行った。これらの実践を整理すると以下のようにまとめられる。

【言葉が少ない子どもの場合】

《子どもの様子と支援の方向》

遊びの中で担当スタッフ（教員）が言葉を付け加えたり言い換えたりすることで、使える言葉を増やしていく取り組みを行った。少人数の子どもに、担当スタッフが手厚く関わるができる環境であることでこそ可能な取り組みである。

例えば、おもちゃの受け渡し場面に、担当スタッフが「友達にどうぞと言って渡そう。」と言葉をかけると、子どもが「どうぞ。」と言葉を添えて、友達におもちゃを手渡すことができた。受け取る側も同じく、「ありがとうって言うとおもちゃを受け取ろう。」と担当スタッフが子ども言葉をかけ、「ありがとう。」と言って受け取るように促した。

また、「いっしょに遊ぼう。」や「ごめんなさい。」など状況を把握しているスタッフと、状況にあった会話を練習していった。吃音がある子どもに対しては、「ゆっくり話すといいよ。」や相手の子どもに「待ってあげてね。」などの言葉をスタッフがかけることで、子どもに相手に言葉が伝わったことの成功体験が積んでいけるようにした。

〈考察〉

幼児期の子どもにとって言葉の発達は、定型発達においてもこの時期の重要な発達の課題である。言葉が少ないという様子には、個々の子どもの様々な状況が考えられるので、言葉を身に付けていく過程を大事にしながら応答する大人の役割が大切になってくる。個々の子どもに向き合う大人（ここでは担当スタッフ）とのやりとりや反応の中で、言葉の発達が促されていくことを丁寧に考え、担当スタッフが遊びの中での必要な状況を捉えて、子どもとのやりとりの中で言葉に向き合う場面でのかかわりを意識しながら支援を重ねていくことが重要であると考ええる。

【園でのトラブルが多い子どもの場合】

《子どもの様子と支援の方向》

所属している幼稚園や保育所等の園でトラブルとなる子どもの多くは、遊びの様子からも言葉によるコミュニケーションの難しさが考えられた。なかなか自分から言葉が出なかったり、言われた言葉の理解が難しかったりすることもあり、自分の思い優先させて行動したり、言葉のかわりに手がでてしまったりなど、結果として友達とトラブルになることが多く見られた。そこで、言葉の少ない子どもと同様、獲得語彙を増やすとともに、遊びの中で言葉を使う経験を小集団の中で重ね、実際に園で使えるように働きかけた。

また、動きが衝動的であったり乱雑であったりする子どもについては、事前に意識してほしいことを約束し、その都度、担当スタッフとその約束を確認することで、気持ちをコントロールする練習を行った。例えば、スタッフに伝えてから動くこと、使ったものを片付けるやおもちゃを振り回さないなど、具体的な約束事から、仲良く遊ぶなどに徐々に抽象的な約束事へと、スモールステップで子どもが意識することを変化させながら自分で気持ちをコントロールするという経験を積んでいけるようにかかわった。

〈考察〉

子どもが所属する幼稚園や保育所等での生活は、集団生活であり、同年齢の子どもとのかかわりは、その時期のそれぞれの子どもの発達の様相が関係してくると思われる。こうした幼児期の子どものトラブルとも言える場面では、それぞれの子どもには思いがあっても、必要な言葉が分からなかったり思っている言葉にならなかったりなど、相手に対して、あるいは、必要な状況で自分の思いを上手く表現できない場合も多い。また、この時期の子どもは、まだ相手に思いがあることがわからず、相手にかまわず思いのままに突き進んだり、自分の思いが強く相手の思いに気づいてもそれを受け入れられなかったり、自分の思いとの折り合いがつけられないなど、子どもの発達の姿も重なってくる。そのため、子どもにかかわる大人には、一人一人の子どもの発達の状況や特性、出会う状況に合わせた必要な支援を根気よく積み重ねていくことが求められる。

『ヤマミィる一む』での活動は、年少・年中と年長で分けた小グループでの活動と、全員が一緒にする活動でも園の規模とは違う小さい集団での活動である。そのため、それぞれの子どもに合わせて、担当スタッフが個別に対応できる環境が保障されるのである。この環境での担当スタッフの個々の子どもに合わせた支援は、一人一人のその時の発達の課題や状況を見とりながら、即時的に必要なかかわりをしていくことを可能にしている。さらに、毎回の活動から、その時々の子どもの状況を把握しながら次の回の活動での支援へと、子どもの育ちを緩く見通しながら支援をつないでいくことができ、そうした支援も『ヤマミィる一む』の強みであると考えられる。年間計画に基づいて、『ヤマミィる一む』としての全体の流れと同時に、個々の子どもの課題に合わせて、小グループなど小集団での活動を柔軟に取り入れていくことが大切になる。

【集団参加が難しい子どもの場合】

《子どもの様子と支援の方向》

集団への参加が難しい子どもへの支援では、好きな遊びや夢中になれるおもちゃを見つけ、その遊びを担当スタッフと楽しむ中で、徐々に友達を意識できるようにした。それぞれの子どもの様子を見ながら、いろいろな遊びをやること、苦手なものはどのような支援をすると遊びに参加できるかななどを探り、コーナーでの遊びや粗大運動を含む簡単アスレチック、絵の具を使った遊びや工作、風船を使った遊び、水遊びなど様々な活動や遊ぶことを楽しむことから集団に交わっていきような体験を重ねられるようにした。

集団への参加が難しい理由の一つに、音や匂い明るさなどに過敏な場合が考えられることもある。こうした状況にある子どもの場合、その子の苦手な環境への対処方法を探っていくとともに、その子どもに合った環境で活動を個別にすることから始めるようにした。また、言葉の問題であったり、衝動性の問題であったりすることも多く、こうしたケースの多くが重なって見られることもあった。

〈考察〉

この時期のすべての子どもに言えることだが、集団へ参加していくことそのものが発達における課題でもある。幼児期の子どもは、家庭という身近な人の集まっている小さな集団から、幼稚園や保育所等へ就園することで、自分以外の多くの人と共に生活する集団へ入っていったり、その小さな社会での生活の中で、子ども自身の必要感に限らない社会的に必要な人とかかわりが求められたりしていくことになる。

集団への参加が難しい子どもは、それぞれの特性など個別の理由からくる難しさを抱えていることが伺える。そのため、一人一人の子どものいろいろな場面での様子を見とりながら、その子どもが自ら環境にかかわっていく姿を大事にしながら、やがて集団にかかわることや集団で過ごすことの楽しさなどへとつながっていくような体験を重ねていく支援が重要であると思われる。

『ヤマミィる一む』では、同年齢の子どもを中心とした小グループが同じ空間で過ごすことから、一緒に楽しむ活動など、基本的には、小集団での活動を個々の子どもの状況に合わせて柔軟に組み入れていくことが可能である。また、一人一人の子どもの姿を丁寧に見取りながら、適当な環境を整えたり、その都度必要に応じて支援したりなど、子どものペースに合わせた体験の広がりをデザインしていくことができるのである。

【初めての場所や人が苦手である子どもの場合】

《子どもの様子と支援の方向》

初めての場所や人が苦手と思われる子どもには、無理に活動に参加させず、安心できる人と一緒に活動することから始めていった。最初から何かに取り組むのではなく、その場にいるだけ見るだけから始めた。母親と一緒に活動できる子どもには、本人が「もういいよ。」と言うまでは、母親といっしょに活動することも大事にしていると、そのうち、その場所や担当スタッフに慣れていくことで、安心して活動ができるようになってきた。こうした子どもの中には、10回程度の参加後に慣れてくるなど、回数や時間を重ねることが必要なこともあった。

『ヤマミィる一む』では、就学後に学校という環境になるべく早く慣れることができるよう、附属特別支援学校内の施設を通常の活動場所として使用している。教室や体育館、運動場など、繰り返し見たり活動したりしておくことで、恐怖感が薄れ就学後スムーズに学校での活動でも自分の力が発揮できるのではないかと考えている。こうした活動の成果として、子どもの中には本校（附属特別支援学校）を就学先を選ぶ子どもでできている。この子どもの場合、『ヤマミィる一む』の活動に一人で参加できるまで、一年以上かかったが、就学後は集団への参加もスムーズで、本校での学校生活をその子どもなりに送ることができている。

また、給食の体験においては、偏食のある子どもの偏食の程度、例えば、全く手が付けられないのか、友達といっしょであれば口にすることができるのか、給食自体とることが難しいのかなどをあらかじめ把握することができるので、それぞれの就学後に向けて給食等についての支援を考えていくことが可能となった。

掃除については、ほうきの使い方やぞうきんの拭き方などの場面では、レースにする場面を設定するなど、遊びの中で体験していくように工夫した。

〈考察〉

初めての場所や人が苦手である子どもの多くは、新しいものへの興味・関心よりも不安や不安からくる恐れなど、様々なことへの抵抗があるために、動けなかったり自分を表現できなかったりすることが伺える。

子どもにとっての小学校への就学は、単に場所や施設が変わるといような目に見える環境の変化だけでなく、そこでの人との関わりや生活リズム、活動や学び方やそれらが醸し出す空間や時間の感覚の違いなど、いろいろなことが重なり合って不安を煽っていると思われる。私たち大人でも新しい環境や生活の始まりでは、いろいろな面から不安を感じることもあるが、就学に直面する子どもたちにはなおさらである。

こうした場合、身近なところから、少しでも馴染みのあるものがあったり知っていることがあったり少し経験していたりすることで、自分に近い感じを持てたり安心して知っていることから近づいたりすることができるのではないかと考える。『ヤマミィる一む』は、附属特別支援学校内に設置しているので、学校の雰囲気から学校という空間のもつ様々なことまでを、『ヤマミィる一む』の活動の中でも、また、『ヤマミィる一む』の活動環境に入ることからだけでも、子どもが自分の肌で学校の感じを体験することを導いている。それに加えて、実際の学校の活動に参加したり、小学生の様子を見たり実際にかかわったりなど、直接学校での生活に参加することも可能である。こうした生活の中で学校がつながっている場所として見えてくるように支援を重ねていくことが、就学に向けての準備としても有効であると思われる。

【手先が不器用、書字が整わない子どもの場合】

《子どもの様子と支援の方向》

手先が不器用、書字が整わない子どもの様子については、子どもの主に年長児の保護者から相談が出るが多かった。個別に子どもの様子を見ながら、遊びの中で手先を使う取り組みを入れていった。所属する幼稚園や保育所等の園で経験から苦手と思うようになってきていると思われる子どもも多く見られたので、活動として簡単なものから取り混ぜながら、少しでもできることをほめることで自信がついていくような支援を大事にした。また、不器用さが見られるのは、経験の不足や目と手の協応の難しさも考えられるので、目の動きに関するアセスメントを行い、子どもの課題に合わせた活動を取り入れるようにした。

その他、身体の粗大な動きにも個別に取り組むなど、バランス感覚や体を動かす経験を積めるようにした。例えば、大きな積み木を動かして積んでいくこと、アスレチック運動やでぼこの道の散歩なども行った。あるいは、風船を使った遊びやボール遊びなど、協調運動についても取り組んだ。

〈考察〉

手先の不器用さやそれに伴う書字に関する課題をもつ子どもは、その活動の一つ一つでの状況で困り感を

感じていることはあるだろうが、それらの活動にかかわる手先の巧緻性や書字の経験の前に、手先の動きを支える身体の発達に関連した課題も考えられる。それぞれに特有な特性をもつ子どもは、その経験にも偏りが見られたり、活動の範囲が限られたりなど、個別に考えらえる経験の不足や活動への取り組みにくさなども見受けられ、それに伴っての自信のなさや活動への抵抗があることも受け取れる。

幼児期の教育の基本でもある遊びを中心とした生活の中で、子どもは興味・関心に従って自ら環境に関わりながら様々な経験を積み重ねられるように保育者など大人が支えていくことは、この時期の子どもの心身の総合的な発達を促していくことでもある。子どもの育ちは、その日々の遊びや活動の姿に表れてくる。こうした外から見える表現する姿や身体の変動の様子だけでなく、目に見えない中身の構造的、機能的、精神的に、また、それらが連動しながら発達が進んでいくのである。したがって、手先の不器用さや書字に関する課題が見られる子どもの場合も、その活動自体を重ねて練習することだけで適応していけるとは限らず、様々な身体の動きを経験することや、それらを繰り返しながら、身近なところから自信がもてるような体験を根気よく積み重ねていくことが大切であると考えられる。

3-4 保護者のアンケートとその結果

通常の『ヤマミィる一む』のプログラムでは、子どもの療育的な活動と並行して、保護者同士が語り合う場の確保やペアレント・トレーニングを行うなど、保護者の支援も大事に行ってきた。しかし、2020年度の【ヤマミィる一むの新型コロナウイルス感染症対応計画】でも、『ヤマミィる一む』の活動場所は附属特別支援学校の校内であったので、在学生への配慮を優先して、保護者の活動は控えることとした。したがって、保護者の学校内への出入りは、入所の子どもの送迎の時のみとなった。そこで、全活動後に保護者にアンケートによる調査をお願いし、活動についての評価として検討することとした。

アンケート用紙については、図1（一部抜粋）の通りであり、質問項目は、1.『ヤマミィる一む』の運営について（実施日の水曜日について、実施時間について〈年長組13:00~14:00、年少・年中組15:00~16:00〉二者選択「よい」「その他」自由記述、実施方法・内容について、自由記述）、2.ペアレント・トレーニングについて（ペアレント・トレーニングのプログラムを取り入れた集団カウンセリングを行うことについての項目の4つから複数選択、実施についての自由記述）、3.大学の専門教員による講演や相談の機会の設定について（ミニ講演会について、専門の先生による相談会の設定について）4.年長グループの学校体験、小学部との交流活動の実施についてである。

結果については、以下の通りである。

『ヤマミィる一む』の運営については、年長組の開催時間の希望に14:00以降、15:00以降という回答があった。開始時間帯を遅らせることへの希望については、『ヤマミィる一む』への参加の年長児は、それぞれ所属している幼稚園や保育所等があるため、その園の降園後等に来所してくるためであると考えられる。自由記述については、表2に示したように、内容の種類から、①活動全般に関すること、②活動内容に関すること、③保護者の活動の意義や希望に分類された。

活動全般に関しては、新型コロナウイルス対策下での開所であったものの活動については肯定的に捉えられており、楽しみな場所になっていたことも捉えられた。また、活動内容については、個々の子どもの特性や困り感に対する具体的な支援が求められていることが伺えた。保護者の活動に関しては、2020年度は保護者の活動自体はできなかったが、前年度から引き続き来所している方にとっては、必要な場所だったことなどが記されていた。

次に、ペアレント・トレーニングのプログラムを取り入れた集団カウンセリングを行うことについては、

令和3年 1月 13日

ヤマミィる一む利用の保護者の皆様

今年度「ヤマミィる一む」の活動へ参加して（アンケート）

大寒の校、皆様におかれましてはますますご健勝のことと存じます。さて、「ヤマミィる一む」のご参加に際しましては、運営の面で色々ご理解、ご協力ありがとうございました。つきましては、次年度以降の「ヤマミィる一む」のよりよい実施、運営のために参考にしたいと考えますので、以下のアンケート項目にご回答いただければと思います。よろしくお願いたします。

「ヤマミィる一む」に参加してのご感想、ご意見、ご要望等

1 「ヤマミィる一む」の運営について

○実施の水曜日について	1	よい	2	他の曜日がよい (曜日)
○実施時間について				
年長組を13:30~14:30としたが	1	よい	2	他の時間帯がよい (: ~ :)
年少・年中組を15:00~16:00としたが	1	よい	2	他の時間帯がよい (: ~ :)

○実施方法・内容（流れ、指導内容、支援等）について、ご感想、ご意見、ご要望等を忌憚なくご記入ください。

図1 「ヤマミィる一む」の活動へ参加して（アンケート）

半数以上が希望しており、他は、保護者同士の情報交換の場の設定だけでよい、あるいは、可能ならという回答であった。いずれにしても保護者同士が語る場があることが望まれていることが見受けられた。この項目の自由記述については、表3のように、①ペアレント・トレーニングの内容について、②活動終了後への希望についての2つの内容に分類された。

ペアレント・トレーニングの内容については、自分自身の子どもへのかかわりを振り返りの機会になっていたり、保護者同士がお互いの話を聴いて支え合えたりする場として機能していることが伺えた。これらにも関連すると思われるが、活動への希望等では、OB会の希望や新型コロナウイルス感染症対策下での希望なども見られた。いずれもこうした保護者同士の場が、保護者への支援の機能を果たしていることが伺える。このことは、2020年度の報告の中でも明らかにしてきたように、子育ての中で何等かの困り感をもつ保護者同士が語り合う場は、お互いを支え合う場ともなるピア・コミュニティとしての役割があり、保護者はこうした機会を必要としていることがあらためて確認された。¹⁵⁾

表2 活動後のアンケート調査より～『ヤマミィる一む』の活動に参加

	回 答	*内容はそのまま、語尾の変更有
①活動全般に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・子・親供に楽しみな活動だった。 ・子どもにとっても、親にとっても有意義な時間だと思う。 ・年長では例年とは違う活動になってしまいとても残念だった。 ・今年はコロナの影響で回数も少ない中、幼稚園とは違った環境でお友達と遊ぶなど無理なく通えて良かった。 ・子どもは、ありのままの自分を出せて、かつ、集団生活を学ぶことができた。 ・今年はコロナの影響もあり時間短縮、他学年との交流の省略、回数の減り、最後の年の分、残念さはあったが、一回一回が充実したものに変わらず、感謝の気持ちでいっぱいである。 ・ヤマミィでの時間が子どもにとっても楽しみなもので、参加できたことが本当に嬉しく思う。 ・コロナで回数が減ってしまいとても残念だったが、毎回笑顔で帰ってくるのですごく楽しんでいたとわかる。 	
②活動内容に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・年長さんでは小学校を見すえた内容になっているかと思うが、苦手なところなどを苦手意識なく出来るようにご指導いただけると助かる。 ・個々の得意不得意に応じた対応、勉強になった。 ・最初と最後にあいさつがあることで「今から始まるんだな」「今日はこれで終わりなんだな」と分かりやすくメリハリがついて良いと思う。最初に流れの説明があることも活動しやすくいいと思う。 ・先生方も色々たくさん声掛けをしてくれ、なかなか入口から入れない時でも入ることができた。 ・お芋ほりや絵の具で大きい紙にお絵かき等、家ではできない事やってもらえて嬉しかった。 	
③保護者の活動に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・親は、ペアトレなどで、冷静に、子供の行動を理解し、接し方を学ぶことができた。また、親同士のお茶会は、同じような状況の子どもを持つ人と情報支援情報支援や悩みの相談、グチの言い合いなどができ、良い息ぬきになっていた。 ・親同士が親密になる場が少なかったため、とてもありがたかった。子どもが小学校に上がっても、同様の場があれば良いと思う。 	

表3 活動後の質問紙調査より～ペアレント・トレーニング等について

	回 答	*内容はそのまま、語尾の変更有り
①ペアレント・トレーニングの内容について	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアトレでの意見交換等、ためになることだけではなく、親の立場（内面）の共有は本当に支えになった。 ・学校にあがってからの事や、ヤマミィで知った子ども達の成長も聞きたい。 ・とても参考になり、子どもと接する際の手助けになった。 ・実践した後のふりかえりでは、子どもの行動に対する対処法や、なぜそんな行動をしたのかなどの意見をもらえ、子どもについて考える良い機会だったと思う。 ・おとし、去年とペアトレはとてもためになりました。他の保護者の話が聞けるのも嬉しかった。 	
②活動への希望等	<ul style="list-style-type: none"> ・OB会の開催を楽しみにしている。 ・コロナの感染状況にあっても実施してほしい。プリント等。 ・ペアトレをしたことがないので、何回くらいするべきなのかわからないが実施してもらいたい。 	

おわりに

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策のもとでの活動であったが、『ヤマミィる一む』については、実施回数は少なかったものの、個別で取り組むことによって、スモールステップで活動を進めることができた。また、社会性を身に付ける活動なども設定し、丁寧に子どもの指導が行える面もあった。保護者の活動後のアンケートにも、参加の子どもと保護者にとっては有意義な時間であることが示された。

具体的には年長児の給食や昼休み、掃除、授業への参加などの小学校体験は、子どもにとっては小学校の生活を練習する機会として、不安を軽減することができることなど、附属学校内にある療育センターとして魅力でもあり期待をされているものであった。しかし、2020年度は、活動が限られて、実施できない活動もあったため、残念であるという振り返りも多く見られた。また、今年度は実施できなかったペアレント・トレーニング（保護者の集団カウンセリング）に加え、大学の専門教員による講演や相談の機会は、保護者の必要感や期待も高く、感染症対策下での実施してほしいという希望もあった。

年長児の就学支援については、『ヤマミィる一む』から、附属特別支援学校への就学へとつながったケースもある。また、年少・年中クラスにも継続の希望がみられた。入所した子どもについては、子どもの所属園である市内幼稚園・保育所等に、『ヤマミィる一む』の担当スタッフが出向き、子どもの様子を見ることも行っており、所属園との連携も良好である。

その他、5歳児発達相談のマニュアル、実施体制については、附属幼稚園と連携し協議を行っている。

以上のように、2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策下で、マニュアルに基づきながらも活動を精選、工夫しながらの実践であったので、検証ステージとして必要な活動のデータがまだまだ十分とは言えない。したがって、引き続き実践の蓄積と、活動を継続するための体制の構築を進める必要があると考える。

『ヤマミィる一む』の活動は、附属特別支援学校にある療育センターの活動ということで、小学部との連携による小学部定員の確保に向けて、市内の幼稚園・保育所で『ヤマミィる一む』の担当スタッフ（教員）がスクリーニング等の活動を行い、支援を必要とされる子どもを『ヤマミィる一む』から就学へとつなげていく活動も行っており、この活動は、療育センターの役割としても期待されるものである。ところが、実際は『ヤマミィる一む』に関わる担当スタッフである教員の人数や時間的・物理的な業務負担等とのバランスには、まだまだ検討の余地が残っている。

また、活動実践における危機対応、管理という面においても支援を必要とする子どもたちの活動をサポートするボランティアの人員確保は重要であるため、今後も学生ボランティア等の学部・附属との連携を生かす仕組みの定着はまだまだ考えていきたい課題である。

これまでも示した通り、感染症対策下での2020年度の活動においても、『ヤマミィる一む』への希望者は継続的にあり、子どもはもとより、保護者の期待も大きいことが見えている。また、『ヤマミィる一む』と市内の幼稚園・保育所から就学先の小学校へとつなぐ連携の体制も進んできている。何より、『ヤマミィる一む』が、一般的公的な療育のサービスに届きにくい子どもたちの発達支援の場としての役割を担っていることや、特別支援学校とのつながりの中で活動できることなど、独自の可能性を包含する療育センターの意義やあり方等にはまだまだ工夫にも期待されるものがあり、今後も引き続き検討していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 特別支援教育をめぐる制度改正
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/001.htm 2021.7.26 最終確認
- 2) 文部科学省 特別支援教育に関する中央教育審議会答申「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」（平成17年12月8日発表）の抜粋
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/001.htm 2021.7.26 最終確認
- 3) 文部科学省 令和3年（2021）6月 障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250_00001.htm 2021.7.26 最終確認
- 4) 立川亜紀子・井上健・小野香織・大塚英里・板持春那・川崎徳子（2019）：就学前段階からの総合的な相談支援を行う療育センターの設置～地域に貢献するセンター的機能の在り方（マニュアルの試案）～、

山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要49, 101-113.

- 5) 川崎徳子・立川亜紀子・中川敏子・板持春那・村田一志・丸山裕奈・大塚類 (2020) : 就学前段階からの総合的な相談支援を行う療育センターの設置 (2) ~地域に貢献するセンター的機能の在り方を検討する (マニュアルの完成にむけて) ~, 山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要50, 45-56.
- 6) 茂野仁美・菅千索 (2007) : 幼児教育における音楽活動からの「気になる」子どもの行動アセスメント—音楽療法的視点からのアセスメントの試み—, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要17, 39-48.
- 7) 木曾陽子 (2011) : 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス—保育士の語りの質的分析より—, 保育学研究49(2), 200-211.
- 8) 木曾陽子 (2012) : 「特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス」, 保育学研究50(2), 116-128.
- 9) 文部科学省初等中等教育局特別支援課 平成24年 (2012) 12月5日「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査研究」について
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf 2021.7.26 最終確認
- 10) 水内豊和 (2008) : 幼稚園における特別支援教育の体制づくりに関する実践研究, 富山大学人間発達科学部紀要3(1), 93-102.
- 11) 臺有桂・田高悦子・荒木田美香子 (2013) : 保育士がとらえる5歳児の健康上の“気がかり”, 横浜看護雑誌6(1), 45-52.
- 12) 大塚敏子・巽あさみ (2016) : 発達上“気になる子ども”の保護者に対する保育園の保育士の支援内容, 日本公衆衛生看護学会誌5(3), 219-229.
- 13) 八木成和 (2017) : 現職教員の対人関係に課題のある子どもへの意識—課題のある子どもと周囲の子どもに関するテキスト分析を中心に—, 四天王寺大学紀要65, 89-96.
- 14) 前掲3)
- 15) 前掲5)